

J-STAGE NEWS

J-STAGEニュース

No.28

No.28 2011年6月30日

ISSN 1346-1990

2011年6月30日発行

独立行政法人
科学技術振興機構

電子ジャーナルの最新情報をおとどけるJ-STAGE機関紙



今号の記事:

- ジャパンリンクセンターの開発について
- J-STAGE3 の XML について
- J-STAGE3 の投稿審査システムのスタートについて
- シリーズ学会訪問 ～J-STAGE 利用学協会様の声～[社団法人 日本航空宇宙学会様]
- J-STAGE News 英語版が公開されました
- プロモーション報告
- J-STAGE 新規利用検討学協会様むけ説明会開催

● ジャパンリンクセンターの開発について

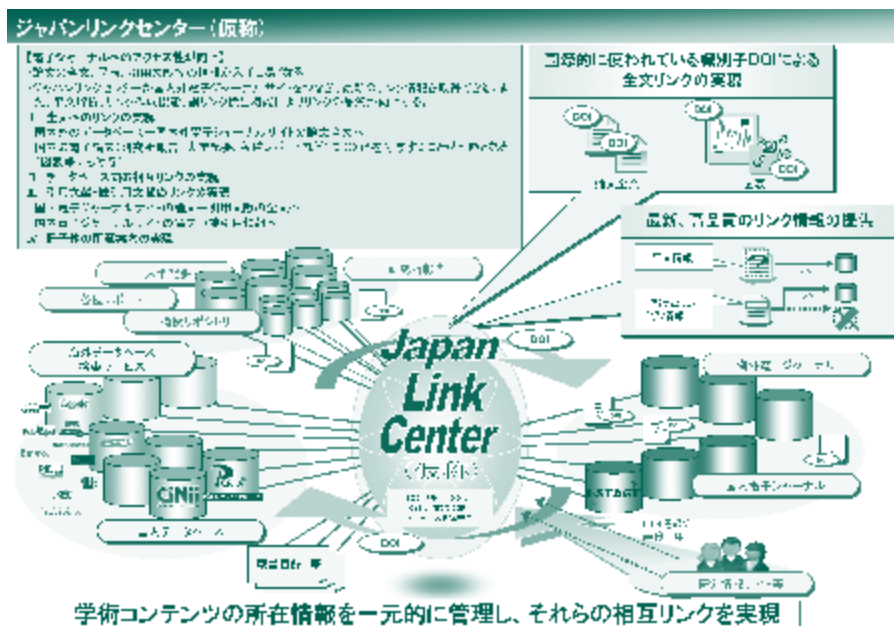
JST(科学技術振興機構)では、現在学術コンテンツの所在情報を一元的に管理し、それらの相互リンクを実現することで学術の流通促進を図るジャパンリンクセンター(仮称)の構築を進めています。ジャパンリンクセンターは、オールジャパンのシステムとして、JST、NDL(国立国会図書館)、NII(国立情報学研究所)等の関連機関が共同運営を行います。システム開発・運用はJSTが担当しますが、関連機関からなる運営会議を設置し、技術面、運用面、普及活動等に関する意思決定を図っていきます。

ジャパンリンクセンターは、RA機関(Registration Agency)となり、国際的に使われている識別子Digital Object Identifier (DOI) を用いて論文の全文、図表、引用文献等の学術コンテンツ全文へのリンクを実現します。また、ジャパンリンクセンターが国内外の電子ジャーナルサイトをつなぎ、最新のリンク情報を取得可能とするとともに、平文解析、リンク作成機能、誤リンク検出機能によりリンクの品質が向上します。

ジャパンリンクセンターの利用機関は、J-STAGE利用学協会をはじめ、国立国会図書館、国立情報学研究所、農林水産研究情報総合センター、各大学図書館等を想定しています。

現在、関係機関に対して協議を進めており、本格版の運用は平成24年度初頭を予定しています。J-STAGE利用学協会はJ-STAGEを介してジャパンリンクセンターの機能を活用できます。

詳細は、今後ご案内してまいります。





J-STAGE3 の XML について

JST 知識基盤情報部 電子ジャーナル担当 久保田 壮一

J-STAGEの論文公開用データは、これまで主にBIBというフォーマットで学協会の皆様に作成いただいております。このBIB形式は、J-STAGE専用のフォーマットです。理解しやすく、比較的作成しやすい形式という評価をいただいていた反面、J-STAGE特有のものであるため、作成されたデータがJ-STAGEシステムへの登載以外に活用できない、などのご意見もいただいております。このようなご意見を踏まえて次期システムであるJ-STAGE3用の記事情報データフォーマットには、米国情報標準化機構(NISO)の規格であるJATS(Journal Article Tag Suite)のXML形式を採用することとしました。このJATSがどのような経緯で誕生したのか及び、JATSの概要をご紹介します。

2000年頃から海外大手学術出版社を中心に論文のデータフォーマットとしてXML形式が採用され始めました。XMLは様々な書誌事項や本文情報などのコンテンツをタグではさんで記述しますが、そのタグの名前は様々な拡張できるようになっており、コンピュータ処理、特にWeb技術ともスムーズに連携できるため、電子ジャーナル化の普及に伴い、学術出版界に広まってきました。

大手海外出版社は、各社各様のタグセットを開発し使用しておりました。様々な出版社や機関がXMLベースへの移行を模索する中、中小の出版社では、独自のタグセットを策定することがコスト上、困難でした。

ちょうどその頃、ジャーナル論文のアーカイブ保存を検討していたハーバード大学やメロン財団などが米国医学図書館(NLM)と学術論文のXMLフォーマット策定のためのプロジェクトを開始しました。出版社各社のXMLタグセットを比較検討し、学術分野を問わず、汎用的に記事データを記述できるタグセットとして2003年にNLM DTDバージョン1を策定しました。(DTDとは、XMLデータフォーマットを規定するルール)。その後何度も改訂を重ね、2010年に多言語化対応可能なバージョンである3.1ドラフト版ができました。このバージョンがNISOに提出され、JATSバージョン0.4版として規格審査を受けています(今年末にバージョン1.0として承認予定)。

NISO JATS(前身のNLM DTDも含めて)は現在、世界の様々な国で採用され、100を超える機関で導入されており、事実上の世界標準のフォーマットとなっています。J-STAGEにおいても、このデータフォーマットを導入することにより、記事の公開が多彩で機能の充実したものとなり、記事データのアーカイブ保管や他機関とのデータ交換などにも、活用できるようになるものと期待しています。



J-STAGE3 投稿審査システムのスタートについて

J-STAGE3新投稿審査システムが、公開系のリリースに先立ち、本年4月から段階的に運用をスタートしました。現在、J-STAGE2投稿審査システムをご利用中の学協会誌から順次、新システムに移行しています。

このたび、J-STAGEで公開をしているジャーナルで、新規に投稿審査システムのご利用を希望される学協会様を対象に応募を開始しました。

〔利用条件〕

- 現在J-STAGEに安定掲載している論文誌であること
- 2011年9月以降設計開始、2012年3月までに本運用開始可能なこと(設計期間1~2ヶ月~ + 試行運用期間を含む)
- 年間一定数(50程度目安)以上の査読論文の投稿があること
- J-STAGE投稿審査システム利用規約を遵守できること
- 締切： 2011年8月31日 消印有効 (必ず郵送のこと)

〔利用優先度審査と利用開始までのフロー〕

- 締切後、JSTにおいて利用優先度審査を行います。
- 9月中旬以降、2011年度利用開始決定誌にはJSTより順次ご連絡いたします。
- この段階で改めて「利用申請書」をご提出いただきます。

導入を検討されるJ-STAGE利用学協会様は、JST電子ジャーナル担当までご連絡ください。なお2012年度以降のご利用については、従来通りお問い合わせ・お申し込みを随時受付いたします。

〔シリーズ学会訪問〕～J-STAGE 利用学協会様の声～

〔社団法人 日本航空宇宙学会様〕

今回は、日本航空宇宙学会様を訪問させていただきました。日本航空宇宙学会は、惑星探査機「はやぶさ」のプロジェクトマネージャーである川口淳一郎先生が編集委員長を務められていた時に J-STAGE に参加を決定された学会で、J-STAGE としても本プロジェクトの成功を心よりお祝い申し上げます。川口先生は現在、本学会の副会長を務められています。

日本航空宇宙様は昭和9年に発足され、現在、J-STAGE で英文誌3誌と和文誌3誌を公開中です。また、投稿審査システムもご利用されています。さらに、「航空宇宙学会論文集」は1934年のVol.1から Journal@rchive で公開中です。英文誌編集委員長で東京大学工学系研究科航空宇宙工学専攻の渡辺紀徳教授にお話を伺いました。



英文誌編集委員長
渡辺紀徳教授

ー 渡辺先生のお立場(任務)についてお聞かせください。

日本航空宇宙学会が発行している、4つの論文誌の編集委員長をしています。委員としては90年代から、現在は任期2年の編集委員長の2年目になります。online 誌が無かった時代に比べて編集に伴う作業量はかなり増えましたが、その分情報発信力もUPしています。

ー 日本航空宇宙学会についてご紹介ください。

本学会は、昭和7年に発足し、大戦後の航空禁止令のため7年のブランクがありましたが、現在は15部門を持ち、航空宇宙分野を広くカバーする国内代表学会になりました。海外とのつながりも深く、14ヶ国31団体と連携して国際合同学会を開催しています。米航空宇宙学会(AIAA)とは、発行誌の目次を掲載し合うくらい密な関係を保っています。また、学生会員の割合が高く、若者の力が非常に大きな学会だと思います。

ー 電子化への取組みと J-STAGE をご利用になるきっかけ(動機)はなんですか？

J-STAGE の拡充と、学会の電子化検討のタイミングがピッタリ重なっていました。JST のような機関が運用する学術雑誌の電子ジャーナルのプラットフォームなら信頼性が高いと判断しました。

ー J-STAGE、アーカイブをご利用になってのご感想は。情報公開や国際発信力強化に役立っていますか。

非常に役立っています。紙媒体時代に比べてアクセス数も増えました。アーカイブでバックナンバーが見られるのもとても良いです。皆、雑誌は捨ててしまいますから。

ー J-STAGE の良い点、不満な点、改善すべき点についていかがでしょうか。

このようなプラットフォームが、リーズナブルな費用で使えるのはとても価値があると思います。投稿審査システムも、特に大きな問題はありませんが、一度カスタマイズをしてしまうと、再カスタマイズが出来ないのが少し不便ですね。

ー 現在、JST では次世代システム「J-STAGE3」の開発に着手しましたが、今後の J-STAGE に望むことは。(機能面、サービス面、販促活動など)

画面の見栄えについては、今まであまり気にしていませんでしたが、検索機能の強化に期待しています。販促については、自分たちでやっていけないといけなと考えていますが、是非ご協力もお願いしたいです。今年度は、Pay per view 機能を導入する予定です。これまでは学会員以外の閲覧が出来なく、ほとんどが非会員である国際会議の参加者は記事を読めませんでした。これからは海外からのアクセスにも期待しています。

ー 最近の学協会を巡る以下の状況についてはどのように思われますか。

(公益法人化法の改正、海外の大手商業出版社へ移っていく学会についてなど)

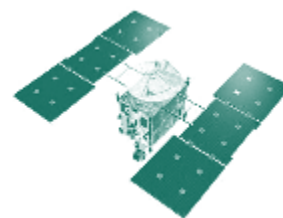
海外誌からのオファーはありますが、真剣には対応していません。分野の国際化の為に海外誌へ移行する、という考え方もあるのかもしれませんが、航空宇宙分野は国策的な面もありますし、今のところ国外へ行く考えはありません。

ー 最後に、今後の方針(抱負)について教えてください。(活動方針、ご予定等について)

航空宇宙分野は、戦後日本のスタートが遅れた分野でしたが、やっと HTV やはやぶさ、MRJ などが出てきて、catch-up から Front Runner のフェーズになってきました。これからは、産学官の連携、人材育成が非常に重要になってきます。幸い、若い人に人気が高いので、是非優秀な人材を取り込んで発展させて行きたいと思っています。

また、日本からの情報発信はとても重要で、国内産業を束ねて、技術的な情報を世界に発信していく必要があると思います。文科省だけでなく、経産省や国交省など、広く連携した情報流通が実現すると良いですね。

ー ありがとうございました。今後のご活躍をお祈りいたします。



小惑星探査機「はやぶさ」
(C) 宇宙航空研究開発機構 (JAXA)

J-STAGE News 英語版が公開されました

このたびJ-STAGE Newsでは、日本の電子ジャーナルをめぐる情報を内外に向けてより広くお伝えすることを目的として、2010年度発行分を中心に、英訳版を作成し公開を開始いたしました。HTML形式でJ-STAGEサイトに掲載されており、どなたでも閲覧が可能です。日本語版とあわせてご覧ください。URL: <http://info.jstage.jst.go.jp/eng/jnews/index.html>



プロモーション報告

2011年6月7日・8日にかけて、中国北京で開催されたICSTI 2011の年次会合で行った展示活動のご報告です。ICSTI(国際科学技術情報会議)はJSTもメンバーの一員で、研究者や図書館・DBベンダー関係者、学生らも参加します。当担当からは小倉と吉田の2名が参加し、展示ブースの来訪者に対し、パンフレットの配布とJ-STAGEを中心としたサービスについての説明を行いました。この度の会議全般を通じて中国市場の活気を強く感じました。実際、中国からの論文数が様々な分野で急増していることは耳にしますし、J-STAGEの国別アクセス数も高いことがわかっており、今後の動向が見逃せません。国内では震災の影響により学術イベント等が相次いで中止となりましたが、今年度もさまざまな機会を通じJ-STAGE掲載ジャーナルのPRを図ってまいります。



東北地方太平洋沖地震に関連する科学技術情報の入手について

今回の災害において、多くの医療・研究・教育機関等が甚大な被害を受け、多くの所蔵学術論文誌のみならず、電子ジャーナル購読認証情報等が滅失・散逸し、学術情報へのアクセスが困難となっている場合があります。こうした状況を受け、学協会様の協力を得て、J-STAGE上で公開されている以下の認証つきジャーナル発行機関(学協会)について、一部臨時フリー閲覧を可能とさせていただくなどの措置を行っています。

ご協力いただいた学協会様に厚く御礼申し上げます。

- ・日本化学会 ‘Chemistry Letters’, ‘Bulletin of the Chemical Society of Japan’
- ・NPO法人近代日本の創造史懇話会 ‘近代日本の創造史’
- ・一般社団法人日本臨床薬理学会 ‘臨床薬理’
- ・特定非営利活動法人日本栄養改善学会 ‘栄養学雑誌’
- ・日本胆道学会 ‘胆道’
- ・公益社団法人日本水産学会 ‘日本水産学会誌’

J-STAGE 新規利用検討学協会様むけ説明会開催


2011年6月4日、大阪市にて、J-STAGEをまだご利用でない学協会様を対象とする「学術論文誌電子化についての説明会—J-STAGEを利用したジャーナルの価値向上をめざして—」を開催しました。国内最大級の電子ジャーナルプラットフォームであるJ-STAGEを利用した発行論文誌の電子ジャーナル化をご検討中の学協会関係者のご参加をいただきました。予定時間を大幅に超えて多くのご質問をいただくなど、関心の高さがうかがえるものとなりました。JSTでは今後、同様の説明会を東京などでも開催の予定です。

編集後記

♪東日本大震災後の4月からJournal@rchive担当に参加しています。それから約3ヶ月が過ぎ、少しずつ復興の兆しを見せる日本。とはいえ、原子力発電所の事故はまだ収束せず、今年の夏はいつも以上に節電が求められています。今まで大した節電を考えたことが無かった私ですが、J-STAGEで最先端の省エネ対策を検索し、実行していきたいと思えます。どうぞよろしく願いいたします。(加)

J-STAGE ニュース No. 28 2011年6月30日

編集:独立行政法人 科学技術振興機構 (JST)
イノベーション推進本部 知識基盤情報部 電子ジャーナル担当
発行人 知識基盤情報部長 大倉 克美
〒102-0081 東京都千代田区四番町 5-3 サイエンスプラザ
電話 03-5214-8837(ダイヤルイン)
E-MAIL contact@jstage.jst.go.jp

 <http://www.jstage.jst.go.jp/>

J-STAGE および J-STAGE ニュースに関するご意見・ご質問をお待ちしております。
JST 知識基盤情報部 電子ジャーナル担当 (contact@jstage.jst.go.jp)

